



Title	超越と解釈：現代解釈学の可能性のために
Author(s)	溝口, 宏平
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39273
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	溝口 宏平
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 1 1 4 4 2 号
学位授与年月日	平成 6 年 5 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	超越と解釈－現代解釈学の可能性のために－
論文審査委員	(主査) 教授 里見 軍之 (副査) 教授 山形 頼洋 教授 塚寄 智

論文内容の要旨

本論文は、現代哲学の一つの重要な潮流となっている解釈学的哲学をその根底にまで遡って見直し、そこからあらためて現代解釈学の可能性を捉え直そうと試みた労作である。現代の解釈学的哲学はその源泉をハイデガーによる現存在分析にもつが、しかしハイデガーの本来の主題である「存在」問題を正面から見据えてはいない。なるほどそれはハイデガーが十分には展開していない現存在の解釈学的構造の分析を押し進めはしたが、ともすればその構造の形式論に流れ、哲学的思惟の内実を見失う傾向にある。他方ハイデガーも解釈学に哲学としての基礎と権能を与えはしたが、しかしその存在論、特に後期の存在論は学としての哲学を容易には寄せつけない秘教的な側面さえ有している。そこで論者は解釈学的哲学にハイデガーの視点から基礎と意義を与えるとともに、ハイデガーの主題をあくまで解釈学的視野のうちで捉え直し、理解可能なものとするように試みるのである。以下順を追って各章の要旨を述べる。

序章 ハイデガーと解釈学的哲学との関わりをめぐって

いわゆる「転回」後のハイデガーは解釈学をさえ形而上学とみなして放棄し、独り高みに立って「存在」を詩的な言葉で語るものであり、その思弁の神秘的な色どりは彼に追隨してきた人をさえ戸惑わせるに十分であった。そうした状況のなかで一九六〇年ガダマーは解釈学そのものを独立した主題とし、ハイデガーが不十分のままに残した歴史性の具体的な分析を試みることによって、ハイデガー思想の継承の可能性に指針を与えた。しかしここには解釈学が理解と解釈という人間の思惟形式のみに関わる学に矮小化されてしまう危険が孕まれていた。もともと初期、前期のハイデガーは、本来の主題たる「存在」の意味へのアクセスとしてこそ、実存を、そしてまたその本質的構造である解釈の作業を明らかにしようとしたのであって、解釈学自体を彼の思惟の主題としたのではなかった。その意味で、「存在」から目を反らすかぎり思惟の内実を逸することになってしまうのである。

第一章 哲学としての解釈学の生成と展開

ディルタイは解釈の契機をなす「体験、表現、理解」を生自身の本質契機とみなし、解釈を生生の生による自己認識とみなす。こうして解釈学を生の哲学によって哲学化した、あるいは哲学を解釈学化した。しかし解釈の普遍妥当性の要求と生の含む歴史的相対性とは矛盾する。ハイデガーはこの矛盾を人間存在そのものがもつ解釈学的構造として

内在化、存在論化した。現存在は歴史的事実性の徹底した制約のうちであり、この制約下で事象と自己とを先行的に理解しており、解釈はこの先行的な理解を明示化、自覚化するものである。解釈は理解と別なものを作り上げるのではなく、その内実を明らかにするものでしかないが、逆に理解の内実はそれだけでは覆われたままであり、解釈によって初めて明確に捉えられうるものである。この理解—解釈のいわゆる解釈学的循環構造を、ハイデガーは単にテキスト解釈にまつわる問題から、「存在」に關与する実存そのもののもつ働きの特性に広げた。ガダマー以降の解釈学的哲学は、問題の多いハイデガーの「存在」問題を棚上げし、かの循環構造を現存在一般の形式的な普遍構造として固定化し、もっぱら解釈作用の哲学的基礎づけ、あるいは構造分析に向かった。しかしここでは解釈学的哲学は一方で普遍理論という相貌を見せつつ、他方で解釈の多様性という相対主義の相貌を示すというアンビヴァレンツが生じている。やはりハイデガーとともに、このような事態を生じさせている根源的な場、存在論的地平こそが再び問われなければならない。それを問う手掛かりは、死に至る「存在」の根本気分としての不安とそれによって経験される世界の「無」にある。

第二章 解釈学的哲学の基礎と課題

聖書や古典の解釈の術であった解釈学がディルタイにおいて哲学化され、さらにハイデガーにおいて存在論的次元への決定的な深化と転回を経験する。解釈学的循環構造はテキスト理解をも可能にする、その根底にある現存在の存在構造である。ガダマーも現存在の解釈学的循環構造を現存在の有限性として、現存在の本来的な根本体制として先ずは押さえる。そして、自らの先入見を先入見として自覚的に意識し、その先入見に自ら帰属しつつもその先入見に隔たりをとることによって、他者や伝承に自らを開いておくという「影響活動史的意識」という概念を提起することによって、そこから、解釈される意味の無際限な開放性、相対性を定立する。しかし意味の成立する場を問題とするなら、ガダマーのような循環構造の形式論にとどまることはできず、不安において開示される世界の「無」、まさに有限性そのものの経験であるこの「無」こそが根源的地平と言われなければならない。この場の上で初めて世界の具体的解釈が図られるべきであり、それが哲学的努力というものである。

第三章 事実と解釈

一切を現存在による解釈に還元し、意味あるものとしていく解釈学の要求に対立し、それから滑り落ちていくものがある。それは意味化されるものと意味化作用そのものが予め事実として存在するという事態である。ハイデガーの一九二三年の「事実性の解釈学」という講義は、それ以上遡りえない存在の原初的な所与性である事実的な生を主題としている。様々な伝統的概念によって覆われてしまっている現存在の事実性をその本来の姿において取り戻し、現存在自身の覚醒へと導く実存的認識がここでの解釈学である。『存在と時間』になると実存的な色彩の強い解釈学は背景に退き、形式的、方法論的な意味づけに置き換えられていく。いずれにしても事実性は解釈学の最後の限界線である。こうした「意味の創出」の場面はわれわれにその基底への思索を要求している。

第四章 現代解釈としての技術論

ハイデガーの一九四九年の『あるといえるものへの観入』において説かれているのは、現代技術は存在者を有用性の連鎖として立て、しかも現存在さえもこの連鎖のなかに部品として組み込む自己目的な、自律的なところをその本質としているということである。さらに、この技術の特性はそれによって存在者を隅々まで隠れなく露現せしめるということにもある。この点では『存在と時間』における、現存在を道具連関の最終目的とみなす立場は超えられていると言える。とにかく、こうした技術の本質はすでに従来の人間中心主義的な形而上学の根本的な変更を迫っているわけである。現代の技術批判が人間の生存の危機の克服を相変わず技術によってなせうと見るのに対し、ハイデガーの技術批判は、技術によって存在者の固有の存在性がそもそも喪失してしまっていると見なす存在論的批判なのであり、人間の意識態度の根本的な変更を要求しているのである。絶えざる頹落から自己を取り戻すことができる契機となりうる「無」の経験こそが世界の変貌の可能性を指示しているのではないか。彼の技術論に対して、それが極端なペシミズムであるとか、現実の社会的諸現象への対決を回避しているとかの批判があるが、しかし彼はもっと根底から存在論的反省を要求しているのであり、技術の問題の本来の所在地を指示しているのである。

第五章 超越論的主体性と超越の次元

デカルトとともに始まる近代の主体中心の形而上学は異他的なものの一切を自己に取り込もうとするが、外界の超越性という壁に阻まれ、自己の有限性をつきつけられて、カントの場合のように自己のうちなる思惟の超越性、無限性すなわち超越論的主体性に退却した。しかし主体における有限性と超越性との折り合いをつけることができず、後期フヒテやシェリングにみられるように再び自己の根本的な有限性、無根拠性に出会うことになった。「転回」以前のハイデガーの現存在分析論もその新しさにもかかわらず、人間存在のなかに超越論的なものを見出そうとしているかぎり、やはり主体性の哲学の極まったかたちと見なしうる。しかしシュルツの解釈にあるように、「存在」が「無」としてしか現れえないこの極まりの境位、新たな超越の次元、すなわち「無」の経験において初めて主体性克服の道が開かれるのである。

第六章 歴史から歴史を超えるものへ

伝統的な超越論的歴史理論は歴史を認識主観が選択的、解釈的に形成したものと見る。そして主観におけるこの構成のためのカテゴリーと構成を導く統制的理念とを解明しようとする。この場合、一方で統制的理念が歴史認識に基準を与えるものであるかぎり、それはもはや努力目標という意味で統制的に働くにとどまらず、構成的に働いていると言わざるをえない。他方その理念は生活世界の歴史的現実と迫られて、絶えず変更の可能性にさらされおり、結局は非超越論的な経験的条件に制約されていることになる。この伝統的理論は構成以前の現実に対する超越性ないし帰属性に対する反省を忘却してしまっている。ハイデガーによれば、現実の存在事物は有意義的に構造化された地平のうちで、主客の分離に先立って予めすでに出会われているのであり、この出会いを可能にしている意味地平こそ存在論的基底なのである。しかしこの意味地平は一義的な普遍史を支える基底とみなされてはならない。地平自体の由来は、極限の可能性としての死への先駆によって開示される「無」にある。地平自体の根拠が「無」であるという存在論的パースペクティブにおいて、歴史を超えるものへの一筋の道がありうるのではないか。

第七章 実践と理解

一九六〇年代ドイツに起こった「実践哲学の復権」運動は、思弁的形而上学の没落と実証主義的精神の台頭のなかで、哲学が実践への指針を与える力を失い、没価値的な理論活動に埋没している状況に対するものであった。しかし実はここには技術の有用性に対する無条件の信頼にとどまらず、もっと根本的には、行為的主観による客観の絶対的支配へと赴く思惟構造が隠れているのであり、その意味で実践優位の思考が潜んでいるのである。したがって本当の問題は思惟か実践かではなく、あるいは思惟を実践的にすることでもなく、このような実践優位を生み出した思惟と実践との特有の先行的な相互連関の場をあかすみに出すことである。ところで、普遍的規則は特殊な事例を基にして立てられ、逆に後者の意味は前者によって規定されるという普遍と特殊、全体と部分との循環構造は解釈学と実践哲学との本質的連関性を示している。両者を直ちには同一視することはできないが、基本的には解釈学は実践哲学的なものであり、実践哲学は解釈学的構造を有しているのである。そこで再び、現存在の「存在」のうちに実践の究極的根拠が問い戻されなければならないことになる。

付論 存在問題のために

伝統的な存在論はアリストテレス以来現代の分析哲学に至るまで、「存在」への問いを存在者への問いに平板化、矮小化してしまっている。これらに対しハイデガーは「存在」と存在者とのいわゆる存在論的差異を提起した。両者は相即不離の関係にありながら、同一ではなく、存在者は「存在」によって初めて「ある」と言われうるのであり、その意味で「存在」は存在者のある仕方を超えているのである。「存在」に現象的に出会うのは、現存在が不安のうちで経験する「無」を通してである。しかし「存在」は存在者ではないという欠如的な仕方ではしか現出せず、それ自体の本性を究明することは容易でない。ハイデガーもその究明を「別の思惟」による将来の課題に委ねたままである。しかしそれがどのようなものであれ、「無」がわれわれに迫ってくるかぎり、「存在」への問いはやむことがないであろう。

論文審査の結果の要旨

かつては方法論的性格を担うに過ぎなかった解釈学が、哲学の主題とされるようになり、さらには哲学そのものの特徴を表すものとさえみなされるに至ったのであるが、この展開は現代哲学の苦境をよく示している。すなわち絶対的な客観的真理とそれを正確に映す主観との二分法に立つ伝統的な立場が揺らぎ、普遍と特殊、全体と部分、理解と解釈、生と学との循環に初めから巻き込まれてしまっている人間存在の有限性、歴史的相対性を出発点とし、それを先ず初めに主題化せざるをえない哲学の現況があり、したがって解釈学の資格と権能の問題は現代における哲学の内的本質に関わる問題なのである。

さて論者は現代の解釈学的哲学の展開を、文献解釈の技法としての解釈学、ディルタイによる解釈学の哲学化、ハイデガーによる解釈学の存在論化、ガダマーに代表される解釈学の脱哲学化という術語で押さえているが、こうした確な術語化によってその変貌過程が大いに理解しやすいものになった。

論者はこの流れのなかで次の二つの点で、興味深い道を歩もうとしている。第一は、解釈学の存在論化によってその後の解釈学の方向を定めたハイデガーも、「存在」問題を専らの思惟の主題とするうちに、学を超出して秘教的な孤高の道にわけ入ったのであるが、論者もその存在論化を受け入れつつあくまで解釈学の立場を徹底していくという際どい道をあえてとろうとしている点である。第二に、ガダマー流の、解釈についての普遍的理論の構築に向かう道が思惟の内実たる「存在」問題を等閑視してしまっているのに対し、やはり最後の拠所として「存在」問題に取り組みなければならないと考え、それに向かう狭き道を進もうとしているところである。

個々の議論のうちでは特に技術論と実践論とに論者の主張がよく具体化されている。技術論に関しては、技術による技術の克服を目指す現代技術論は相変わらず技術至上主義に陥っているとして、一般には軽視されがちなハイデガーの技術論を再評価するべきだと論者は言う。また実践哲学については、現代の実証主義的精神は実は特有の実践的関心によって導かれているという把握、理論か実践かではなく、両者の先行的な相互連関の場に立ち戻るべきだという主張、実践哲学と解釈学との相等性の指摘は特に示唆に富んでいる。

しかし上記の興味深いところは反面難しいところでもある。「存在」についての思惟の要請とそのアクセスとしての「無」というパースペクティブの必要性とが本書の至る所で主張されているが、しかし「存在」は相変わらず謎のままに残されている。解釈についての形式論に対して「存在」問題という哲学的内実が確保されるべきことが再三説かれているが、ではその内実はいかなるものであろうか。「無」を通して本当に何かが見えるのであろうか。ガダマーがその問題にあえて踏み込まなかったのは、彼がそれに気がつかなかったからではなく、むしろこの点にハイデガーの難点を見たからではないであろうか。しかしこうした問いは論者にのみ投げかけられるべきものではなく、目下の現代哲学の壁と見られるべきものかもしれない。

本論文は現代の解釈学的哲学の問題を鋭く探り当てた力作であり、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定するものである。